

加須市の観光と地域経済

▼ジャンボこいのぼりの加須

加須市の名物と言え、ば、“こいのぼり”に“手打ちうどん”が定番だが、2010年（平成22年）に加須市、騎西町、北川辺町及び大利根町が合併して以降、観光を含めた同市のイメージが変わりつつある。とりわけ観光面では、市域が広がったことで見所も増え、新たな観光需要が芽生えだした。その加須の代名詞でもある“こいのぼり”は、全国でも有数の生産地として定着した。歴史は古く、明治の初めに傘や提灯ちようちんを作っていた職人の副業として始まったと言われている。その後、1923年（大正12年）の関東大震災で、東京でのこいのぼり生産が減少したことや、品質の良さから加須は、全国一の生産地として脚光を浴びるようになった。以来、100年近くにわたって年間約50万本のこいのぼりを生産している。それだけに「こいのぼりのまち」としても知られ、中でも木綿の布に顔料だけで、職人が精魂こめて描く“手描きこいのぼり”は、伝統工芸品として観光客が買い求めていくほど。

もっとも、加須のこいのぼりを全国区にしたのは、こうした歴史や品質だけでなく、市民の情熱だった。それが“ジャンボこいのぼり”の存在で、今では利根川の河川敷で、大空に泳ぐ“ジャンボこいのぼり”が5月の風物詩ともなっている。ただ、誕生までには数々の秘話があり、苦労の末のデビューだった。埼玉博覧会の開催を翌年に控えた1987年（昭和62年）、加須青年会議所が中心となって「博覧会でこいのぼりによるまちおこしをしよう」と市民に呼びかけた。この呼びかけに延べ4,000人の市民が協力、出来上がったジャ



世界一大きいジャンボこいのぼりは、加須市のシンボル

ンボこいのぼりを市民運動公園で泳がせることにしたが、クレーンでつり上げたところであえなく頭の部分から裂けるという失敗に。その後、青年会議所の有志が各分野の専門家に相談、特製の布でつなぎ合わせて風洞実験を行い、翌年には利根川の河川敷で長さ100メートル、重さ600キロのジャンボこいのぼりの初遊泳を成功させた。

博覧会終了後、ジャンボこいのぼりは加須市に移管され、毎年の市民平和祭のイベントで遊泳しているが、現在のジャンボこいのぼりは3代目で、長さは変わらないものの生地をポリエステルに替えたことで重さは約350キロに減っている。3代目も延べ2,500人の市民が製作に協力、6種類の塗料約500キロで絵付けが行われ、昨年の市民平和祭にはわずか、一日の遊泳にもかかわらず約11万人の観光客が訪れた。

▼うどん屋は市内に約40店

こいのぼりに劣らず観光客の人気となっている“手打ちうどん”は、市内に約40店が味を競っている。江戸時代から加須市の周辺では小麦の生産が盛んだったことから、うどん



市民のアイデアで生まれた肉味噌うどん

を食べる習慣があったそうで、300年以上の歴史があるという。お祭りや冠婚葬祭の締めくくりには必ずうどんが振舞われ、正月や春秋の彼岸には家事に対する女性の日ごろの労をねぎらって、男性がうどんを打つという昔ながらの風習も残っている。その加須のうどんの特徴は、つやがある光沢とみずみずしさ、手打ちならではの腰の強さと、のど越しの良さにある。冷たい“もりうどん”に、冷たいつゆが基本的な食べ方だが、大葉の香りとごまみそ風味の“冷汁”、ナスやネギを油でいためた温かい“ナス南蛮”、“ネギ南蛮”、さらには“けんちんうどん”、“みそ煮込みうどん”など多彩なメニューがある。

最近では、市民のアイデアで生まれた、肉味噌と温泉卵をトッピングした“肉味噌うどん”が第7回埼玉B級ご当地グルメ王決定戦で優勝したほどで、加須のうどん文化を一層高めた。そうした店が創意工夫して提供するうどんの味が楽しめるとあって、食べ歩きの観光客が訪れるのも加須市の観光魅力で、年間を通して約20万人が訪れている。食べ歩

きをもっと楽しめるようにと、加須手打うどん会では、2つのスタンプラリーコースを企画。1年以内に、のぼり旗を立てた24店で食べる全店制覇コースでは、記念品がもらえるほか、10店のスタンプを集めれば“もりうどん”か“かけうどん”一杯がサービスとなるイベントを行って、観光客の誘致促進を図っている。

うどんだけでなく、食べ歩きで目立つのが和菓子屋を巡る観光客。小麦食文化圏の加須市には、『朝まんじゅうに昼うどん』という言葉があるほど、市内には意外と和菓子屋が多く、甘党にとっては見逃せない個性的な店が散在している。中でも塩味の餡入り大福の“塩あんびん”や、餡入りの蒸しまんじゅうに赤飯をまぶした“いがまんじゅう”は、加須市の名物菓子。この他、“こいのぼり焼き”や“野菊まんじゅう”、“無花果羊かん”なども一度は食べてみたい和菓子だ。こうした和菓子の食べ歩きをもっとPRしようと、加須市ではいま観光戦略を練っている。

▼多彩な観光資源が豊富

加須市の観光資源は、こいのぼりやうどんだけではない。家族連れに人気があるのが羽生市境の志多見にある「むさしの村」で、北埼玉地域で唯一のファミリーレジャーランド。敷地内には自然の中で楽しめる24のアトラクションがあり、中でもSLブルーファーム号の走る遊園地やポニーの乗馬体験ができるふれあい牧場は、子どもたちの人気スポット。また、「わくわくファーム」ではイチゴ狩りやブルーベリー狩り、サツマイモ掘りなど1



1年を通して家族連れで楽しめる「むさしの村」

年を通して味覚から収穫体験ができる。夏には、大小2つのプールが家族連れで大賑わいとなることから、年間約35万人の観光客が訪れているという。

利根地域のレクリエーション施設の核としてオープンした「加須はなさき水上公園」(市内水深)も家族連れの観光地で、夏場にはさざなみプールや、スライダープールなど7つのプールで遊べる。もちろん、夏以外でも自然観察園や芝生広場、ボート、マス釣り、手打ちうどんの体験ができ、広い園内を貸し自転車で回るのも楽しい。年間約15万人が訪れる公園で、子どもだけでなく大人も十分に1日が過ごせる。

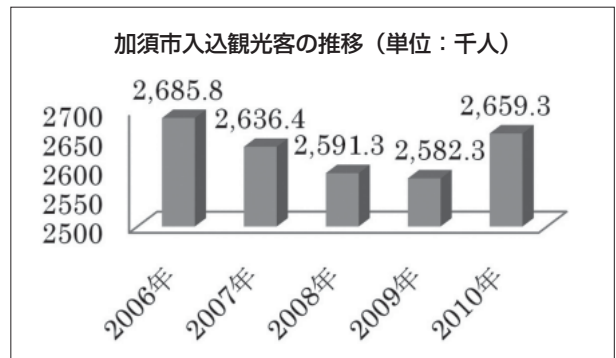
▼加須市が誇るナンバーワン

1市3町が合併したことで、さらに観光スポットは充実したが、合併前にアピールしていたご当地ナンバーワンもさらに増えた。現在、世界ナンバーワンのジャンボこいのぼりと、米の生産・作付面積やイチジクの出荷量

など埼玉ナンバーワンがある。これに、全国の校歌作曲数ナンバーワンの故下總皖一しもおさかんいちを含めれば、6つのジャンルに及ぶ。中でも、合併で新たにナンバーワンに加わった「藤の枝ぶり」と「オニバス」は、市内では名所ともなっている貴重な観光資源だ。

「藤の枝ぶり」は、騎西地域にある玉敷公園の大藤のことで、枝が埼玉一長く、樹齢が400年以上の県指定天然記念物。百畳敷きと言われるほどの枝を広げた様は壮観で、毎年5月のゴールデン・ウィークには大勢の観光客が訪れ、1メートルほどの垂れた花房の下を歩く人たちが絶え間ない。県内で唯一の自生地である北川辺地域の「オニバス」(鬼蓮)は、池や水路でみられるスイレン科の一年草で、全体に鋭いトゲが生えているため「鬼」の名がつけられ、越中沼に自生していた。水田開発などで越中沼が埋め立てられたことから、一時期絶滅したと思われていたが、その後の水路改修で地中に埋まっていたオニバスが目覚め開花したことから、市の天然記念物に指定されている。5月頃から初芽期を迎え、8月には開花し、9月中旬ごろまで花を咲かせているため、長い期間楽しめる。

ご当地ナンバーワンとまではいかないが、この他にも花が楽しめるスポットがあり、武



蔵国の面影を残す「浮野の里」もその一つ。グリーンツーリズムには最適な場所で、屋敷林やクヌギ並木などの田園風景が広がり、1995年度（平成7年度）に全国『水の郷』百選に認定され、2007年度（同19年度）には県から『緑のトラスト保全第10号地』にも指定された。四季折々に見せる様々な表情が魅力で、中でも黄色いじゅうたんのよう的一面に広がる“ノウルシ”は観光客にとって大のお気に入り植物。このノウルシは、トウダイグサ科の多年草で、浮野の里には約1,000平方メートルの群生地があり、4月中旬には黄色く色付く。絶滅の危険が増しているとして、環境省や県から絶滅危惧二類に指定されている貴重な早春植物だ。

こうした浮野の豊かな自然や田園風景を守り、後世に残そうと地域の住民有志が市民活動組織として『浮野の里・葦の会』を結成。保全活動だけでなく、毎年6月には主催者と

なって「浮野の里・あやめ祭り」を開催、市内外から訪れた観光客を田舟に乗せて、自ら育てたハナショウブを鑑賞させている。「浮野の里」のほか、花見の名所はまだ多くあり、「玉敷公園の桜」や「花崎北公園の桜」、「渡良瀬遊水地」、「旧川ふるさと公園」なども、花の見ごろになると多くの観光客が訪れる。また、騎西地域の「ふじとあじさいの道」は、玉敷公園から総合公園、生涯学習センター『キャッスルきさい』を藤とアジサイで結ぶ約1,500メートルの遊歩道で、ウォーキングツアーリズムとして親しまれている。

伝統文化の祭りや史跡も豊富で、伝統の祭りでは大利根地域の「円満寺の大祭」（開運種まき式）や「不動ヶ岡不動尊總願寺の節分会」、あるいは各地で行われている獅子舞など、無形民俗文化財がある。史跡などを含めた文化財では、円満寺の「木造千手観音坐像」や徳性寺（加須地域）に所蔵されている「寺

加須市の主な観光資源

- **加須市民平和祭**…毎年5月3日に菜の花が咲く利根川河川敷で行われる。全長100mのジャンボこいのぼりの遊泳やステージショーなど多彩な催し物でにぎわう、市民の平和への願いをこめた祭典。



- **北川辺あやめまつり**…旧川ふるさと公園で毎年5月に開かれる「あやめまつり」は、北川辺地域で一番のイベント。水辺に咲く清楚な花はもちろん、各種イベントや模擬店が充実し、家族連れにも喜ばれている。



子屋絵馬」、大きさが日本最大と言われている「金剛院画像板碑」(騎西地域)など、市内には数多くの有形文化財が点在し、加須観光の魅力の一つになっている。

▼目標値定めて観光振興

1市3町の合併で誕生した加須市。その結果、市内には自然から物産、歴史、文化などの観光資源が飛躍的に拡大した。観光は他産業に比べ経済波及効果が大きいことから、振興を図ることが地元経済に直結する。そこで、合併前まで個々に取り組んでいた観光振興を一体化して強化するため「加須市観光ビジョン」を策定し、2012年度から各種の振興策を実施していくことにした。ビジョンの目指すべき方向によると、市民一人一人が観光に参加し、観光客と交流を深め、個性的で美しいまちをつくることなどを基本方針としている。

その上で、主要な観光拠点の充実・整備を図りながら潜在資源を掘り起こし、交通手段を含めたインフラを整え、他地域と広域連携して加須市観光の魅力をアップさせていくという。

つまり、市民参加で観光客をもてなし、様々なことを体験・学習してもらい、日帰りの観光を目指すというもので、あくまでも観光振興の主役は市民で、行政はサポートする立場に回るとの役回りだ。そのためには「市民に“おもてなしの心”を育んでもらい、その心を根付かせてもらいたい」(商業観光課)と望む。観光振興に向けた市民参加では、市民の意識は高く、既に合併前から各地で観光ボランティアが組織されている。前述した『浮野の里・葦の会』だけでなく、オニバスのガイド、あるいは騎西城を拠点にした歴史ガイドなどがある。商業観光課では、「こうした市民観光ボランティアを行政の主導ではなく、



- **利根スカイフェスティバル**
…利根川河川敷緑地公園を会場に、加須市周辺の商工会青年部が中心となって、地元住民や様々な団体が共同で行うイベント。利根川

の雄大な大自然を背景に、「空」をテーマにして、アクロバット飛行・グライダー飛行などのスカイ系イベントのほか、ライブなどのステージイベント、地元特産品の販売や模擬店など、大人から子どもまで楽しめるさまざまなイベントが開催される。



- **いなほの湯**…2001年(平成13年)4月に、ごみ焼却施設の余熱を利用した健康増進施設としてオープンした施設。スパ施設や入浴施設があり、市内外の多くの人々が利用している。

また、施設北側の田んぼに植えられている「ホテイアオイ」が毎年8月から9月にかけて見事に開花する。うす紫色した花が田んぼの一面に咲き乱れる。



- **加須未来館**…プラネタリウムや天体観測室をはじめ、大型映像装置と学習室、工作室などの学習施設の他に、農産物の直売所や加工施設等を備えている。1階の

交流ホールでは、宇宙服など宇宙に関連した展示物やプラネタリウム、150インチの大型映像装置などを展示。2階では、科学実験室や木工体験室、調理実習室で工作や様々な催しものを体験できる。また、3階にある天体観測室には200ミリのクーデ式屈折望遠鏡があり、天体を観察することができる。開館時間午前9時～午後5時

- **スポーツ遊学館**…ヨットやカヌーのウォータースポーツ、サイクリングが楽しめるほか、会議室等も備えた地域振興施設。



藤の枝ぶりは県内一。樹齢400年以上という。

あくまでも行政はサポートする立場で、市民の自主性を大事にしなが、組織化してもらい発展させていきたい」と話す。

一方、交通手段などの観光基盤整備では、今年10月から市内循環バスを充実させて大利根・北川辺地域まで延伸させる計画だ。加須市までの交通アクセスは東武鉄道とJR宇都宮線のほか自家用車か観光バスとなるが、市内に入ると回遊するには交通手段に課題があ



「浮野の里あやめ祭り」で市民が船頭になって観光客をもてなす

った。路線バスやコミュニティバスでの移動手段を充実させることが先決問題で、その一環から循環バスの延伸を計画したが、さらに市として注目しているのが自転車という移動手段。というのも、市内には群馬県渋川市から千葉県浦安市までを結ぶ、全長約170キロの長距離サイクリングロードが利根川沿いにある。そのほかにもいくつものサイクリング

- **加須サイクリングセンター**…埼玉大橋の少し上流にある「加須未来館」付近には、埼玉県が管理・運営する「加須サイクリングセンター」がある。この施設は、群馬県渋川市と千葉県浦安市を結ぶ全長170kmにおよぶサイクリングロードのほぼ中間地点。澄んだ空気の中、利根川・江戸川沿いの季節の草花や景観と、赤城、日光連山から秩父連山、富士山、筑波山など360度のパノラマが楽しめる。



- **北川辺資料館**…2005年（平成17年）6月にオープンした資料館。北川辺地域は、四方を二大河川の利根川と渡良瀬川に囲まれた低地にある。

「水との闘い」の歴史を背景に「水場の産業と低地の暮らし」にスポットをあて、米どころ北川辺誕生までの先人たちの知恵と工夫をこらした農具等をはじめ、先人の暮らしの歴史が学べる。



- **渡良瀬遊水地**…渡良瀬遊水地は関東平野のほぼ中心に位置し、栃木・群馬・埼玉・茨城4県の県境にまたがる面積33平方キロメートル（東京ドームの700倍）

の大遊水地。この遊水地は洪水を防ぐという重要な役割をもっているだけでなく、貯水池によって供水調節力を高め、生活用水・農業用水・水不足の解消・川の流れを保つために役立っている。本来の低地の自然環境が保全され、緑豊かで広大なヨシ原が広がり、そこには多くの植物・昆虫・鳥たちが生息。植物観察やバードウォッチングにも最適なスポット。



- **光明寺の三尊像**…光明寺の本尊である阿弥陀如来立像は、像高78.7センチメートルで、衣文は金箔に截金の総模様となっている。脇侍は像高50センチメートルで勢至菩薩像と観音菩薩像であり、本尊と同一の作者によるもの。室町期の作と考えられるが、文政年間に一部補修されている。

コースがあり、地形的に平坦な加須市にとって自転車は恰好な交通手段となるからだ。その自転車を利用した回遊手法こそが、今後の加須市の観光振興にとって重要なカギを握ることになる。

▼ポタリングで観光を促進

立教大学観光学部の学生が武蔵野銀行と連携して、県内各地の観光マップを作製しているが、2012年の対象地域に加須市が選ばれ、3月に“ぶらって加須”マップが完成した。学生たちが着目したのが、まさしく自転車での観光で、平坦な市内の観光名所巡りに自転車を活用する散歩的なサイクリング、すなわち“ポタリング”を提案している。今後はこのポタリング観光を定着させるために、各種の施策が実施されていくはずだが、とりあえず市内循環バスの充実に合わせて、市内の各

総合支所や商工会館、学習センターなどを拠点に、自転車の乗り捨てが可能になるよう試行することになっているという。同時に今秋には、これまで開催していたB級グルメ大会に替えて、サイクリングイベントを企画。詳細は検討中だが「スタンプラリー的な方法で、各観光スポットを巡りながら名物のうどんや和菓子、農産物の直販などをコラボレーションさせたい」（商業観光課）としている。

全国的に知名度が高い観光資源がない加須市にとって、大勢の観光客を呼び込むには苦しい面がある。しかし、目玉となる観光資源がなくとも、市が任命している多数の観光大使や、市民参加による観光客誘致を行い、「来て良かったという満足感を与えられるような加須市にしたい」と商業観光課。10年後には、現在の年間入込観光客数の1.2倍に当たる320万人を目標に設定し、地元経済の発展を目指していく。

(写真・資料提供 加須市商業観光課)

- **オニバス自生地**…オニバスはスイレン科の巨大な浮葉の一年草。やや富栄養化した池や沼に生える水草で、毎年5月頃から水底の種子が発芽し、6月頃から矢じり型の幼葉をのぼす。7月頃にはとげのある丸い葉を拡げるようになり、浮葉の直径は条件がよければ2mにも成長する。7月下旬頃から9月上旬頃まで、早朝に赤紫色の可憐な花を咲かせ、午後には閉じてしまう。花は2～3日開花した後、水中に沈み種子を作り、種子の一部が翌年の春に発芽するが、残りの種子は数年間に分かれて発芽することにより、環境異変による絶滅の危機から身を守るという性質を持っている。その昔、飢饉に備え全国で栽培されていたとも言われ、種子や葉柄は食用にしていた。加須市では県内唯一の自生地として、大切に保護している。



- **騎西城**…旧騎西町が町制施行20周年を記念して、1975年（昭和50年）に建築した郷土資料展示室。史実の騎西城は、土塁や塀を廻らした平屋の館だったが、天守閣を持つ城として復元されている。城を模した鉄筋コンクリート3階建てで、1階は発掘調査の出土品（旧石器時代の石器、古墳時代の埴輪、戦国時代の兜ほか）、民俗資料（酒徳利、蓄音機、古文書ほか）を展示。2階は民俗資料（農具、戦争に関する資料、相撲に関する資料ほか）、旧騎西町の写真（昭和10年頃の藤まつりの写真ほか）を展示している。3階は、旧騎西町の写真（航空写真ほか）を展示し、回廊からは市街が眺望できる。

